

# 村田彩

オブジェ作家

2022年11月

## 村田彩独占インタビュー

11月4日から開催の二人展に向けて大胆な造形美とカラフルな練り込み技法で注目を集める村田彩さんを独占インタビューしました。海外でのアーティストインレジデンスでのご経験や作品に込められた意味などをたっぷりとお聞きしました。



冬虫夏草 H18.3 x W27.0 x D20.5cm

# 桃青



## 村田彩 (むらた あや)

1979年 京都府に生まれる

1998年 京都市立銅駝美術工芸高等学校 漆芸科卒業

2000年 京都芸術短期大学 陶芸科卒業

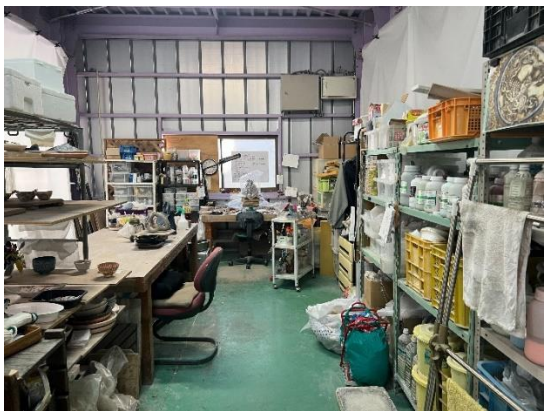
2004年 京都府立陶工高等技術専門校 陶磁器成形科終了

### ■陶芸始められたきっかけは

高校は京都市立銅駝工芸高等学校で漆塗りを学んでいましたが、高校三年間、作品制作に夢中になり、作品制作という魅力を知ってしまった私にとって、美術系以外の大学という選択肢はありませんでした。そんな中、どの学科を受験しようかと考えていたところ、当時の漆芸の先生が“じゃあ陶芸コースにしてみたら?”とってくれたのがきっかけとなりました。単純な話で、先生にそう言われると、“陶芸は私にあっていいのかも、できる気がする”と思えてしまい、実際粘土も触ってみたいという気持ちもあったので京都芸術短期大学の陶芸コースで陶芸を学ぶことを決めました。

### ■今の工房があるシガラキ・シェア・スタジオに入られたきっかけは？

もともと信楽に来たのは滋賀県立陶芸の森でレジデンスアーティストとして活動を始めたのがきっかけでした。その後、信楽町内でスタジオを借りて作業していたのですが、“今度共同アトリエを作るから入らないか？”とシガラキ・シェア・スタジオの理事の杉山さんに声をかけてもらったのがきっかけでした。



(写真: シガラキ・シェア・スタジオの村田彩さんの工房)

# 桃青

■台湾、アメリカ、デンマーク、フィンランド、韓国でアーティストインレジデンスをされていましたが、レジデンスを始められたきっかけと、どの国が一番印象に残っているかを教えてください。

そうですね。最初に台湾で滞在制作をした時は自分が本当に陶芸の道で生きていくと決めた時期だったので、凄く印象に残っています。ただ、もともと日本で学べない事を外国で学びたいという大義名分があって海外での活動を決めた訳ではないのです。そもそも、日本の公募展に沢山応募していたのですが見事に通らなくて。でも日本でやっている国際コンペはけっこう通るので。自分でもいろいろ考えた結果、海外の審査員がいる方が勝率が高いのではないだろうかという自論にたどり着きました。そこで海外での国際コンペにも積極的に応募して行くことを決めました。

“台湾ビエンナーレ”はそのうちの一つで世界中の陶芸家が応募するコンペでした。そこに自分の渾身の一作品を応募し“よし”と思っているとすぐに返事が来たんです。もちろん英語で。英語の得意な友人にメールを見てもらうと“あと5作品分の写真を送ってほしいって言ってるよ”と言われたんです。普通は1作品なのに、どうしてだろう？と思いながらも追加の写真を送ると数日後“おめでとうございます”と返事がきたんです。そこで初めて気が付いたのですが、実は私が応募していたのは“台湾ビエンナーレ”ではなく、台湾ビエンナーレを主催している同じ博物館が主催する個展選考会だったんです。それで、“え、私台湾で個展するの？そもそも海外に作品どうやって輸送するの？”とパニックになってしまったんです。そこでもう一人日本人で入選されていた小島修さんという作家さんがいらしたので、小島さんと共通の先生や友人にお願いして小島さんを紹介して頂き、作品輸送をどうされるか聞いてみたんです。すると小島さんは“俺は台湾にある国立台南芸術大学で客員作家として滞在して作品制作をするつもりだよ”と教えてくれたんです。それを聞き、“そんなことができるのか！？”と思い、“私もお願いできないでしょうか？”と初めて小島さんにお会いしたにも関わらず図々しくお願いしたのです。そして小島さんの助けがあり、面識がないのにも関わらず学校側も快く受け入れてくれる事が決まりました。このようにして本当に沢山の方々の助けがあり私の初めてのレジデンスは決まりました。

初めての海外での長期滞在は非常に印象深く、様々な経験、思い出そして素晴らしい友人が出来ました。ですから私は勝手に台湾は第二の故郷のように思っています。

その後はアーティスト・イン・レジデンスが他に様々な国でできる事を知り、興味のあるレジデンスや施設、国に行くようになりました。2018年の韓国の後はコロナになってしまい、もう3年はいけないので、また行きたいなとは思ってます。

■海外でアートインレジデンスをしてよかった事はなんですか？

いろんな国に住めるのはもちろんですが、海外の顔料を調達できるのはよかったですね。海外の顔料はとて鮮やかなものが多く派手な色を使いたいと思う私にとって、現地の国の顔料を手に入れられるのは本当に楽しかったです。現地ではまず一番小さい単位で顔料を片っ端から買っ全部テストをするんです。その後に気に入ったものをキロ単位で買う様にしていました。

■先生の作品のインスピレーションはどこからきているのでしょうか？

最初に作ったオブジェは160cmのもので、仏壇の花の形が面白く、そこからインスピレーションを受けました。毎回いろいろな物から新しくインスピレーションを受けられたらいいのですが私の場合はそうではなく、一度作った作品の反省をして、その反省を活かして新しい作品を作っていくことが殆どです。またもう5年以上前にはなりますが、東京で昆虫に特化した展覧会に行きました。昆虫の種類や解体図とか本当に昆虫の全てが分かる展覧会で、今まで昆虫が特別好きというわけでは無かったのですが、その時に

# 桃青

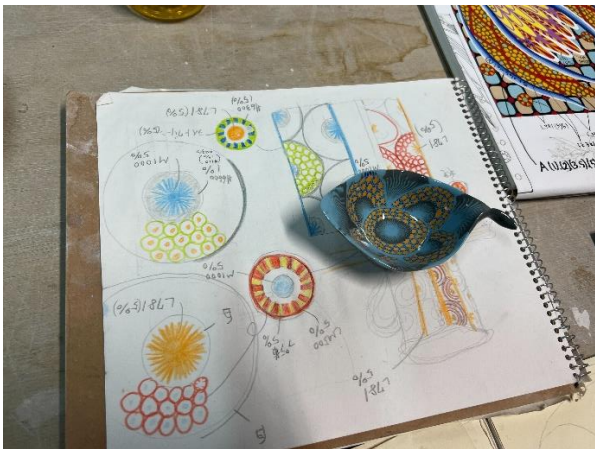
昆虫の模様とかフォルムとかにすごく刺激を受けたのは覚えています。中でもとびけらの巣には大変感動しました。それは言うまでもなくイモムシシリーズのきっかけにはなりましたね。

## ■作品にはどのような思いを込められていますか？

私の作品は生命力をテーマにしています。鮮やかで派手な色のもって生物界ではキノコ、カエル、毛虫、クモとかみんな毒があるものが多いじゃないですか。でもその毒こそが生命力だと私は思うんです。その毒を人間に例えるならば一般的にはあまり良いとされていない、嫉妬心とか野心、野望だと思うんです。ただ人間はそういう毒のような感情があるからこそ楽しいんだと思うんです。それがないと向上したいと思う、上へ上へ伸びていくエネルギーは生まれてこないと思うんです。そういうエネルギーを私の作品から感じてもらえたら嬉しいです。

## ■製造方法について教えてください。

スケッチはどの種類の色を使うかまで本当に細かく行います。使う土は磁土で、電気釜を使用していますね。まずパーツを焼いて、そのパーツを剣山に刺すような形で組み立てていながら本焼きを 1230 度で 4 - 5 回繰り返してききます。仕上げには透明釉を使います。練り込みに使っている顔料は先程話した通り、海外からのものが多いですね。



(写真:村田さんのスケッチブック)

# 桃青



(写真: 村田さんが使用する電気窯)

## ■今回の展示会の見どころを教えてください。

今回初めてオブジェ的な抹茶碗を作ってみました。今まで普通の抹茶碗しか作ったことがなかったので、記念すべき一作目となります。練り込み技法を使っているのももちろん手びねりではなく、底のカーブしている部分は型を使い、周り是一片の板にしてそれを側面に繋げていきます。



(写真: 今回桃青にて展示予定のオブジェ的抹茶碗)

## ■やりがいを感じる時はどんな時ですか？

窯から出たら作品は完成なのですが、私の場合は輸送という大きな壁があるので、梱包して、会場に運んで、無事に展示台に置けた時によくできたと思いますね。

# 桃青

■今までの陶芸生活の中で思い悩んだことはありましたか？また今後挑戦していきたいことを教えてください。

体力的にもものすごくしんどいので、休憩したいと思うことはあります。でもそれはマラソンの途中で少し止まりたいと思うだけで、走る事自体を辞めたいのとは違いますよね。基本的に自分のやっている事に迷いをもつタイプではないので。疑うこともなければ疑問をもつ事はありませんね。もちろん売れ行きが良くないことで悩むこともあります、それなら何故売れないかを考えたらいいと思うんです。作品のクオリティーなのか、時代の流れなのかとか。作品のクオリティーなら、向上させたらいいし、時代の流れならば待てばいいと思うんです。私の作品は派手ですが、やっぱり白とかが好まれる時代もあると思うんです。その時代の流行によって新しい作品を作れたらいいんですけど私はそんな器用なタイプではないので。ただ時代っていうのは変わるんです。ずっと白の時代ではないし、もしくは白の時代でない国を探したらいいのじゃないかなと思います。作品が売れなければもちろん続けていくのは難しいと思いますが、だったらバイトをしたらいいと私は思っています。その結果陶芸以外の仕事が忙しくなって陶芸を辞めてしまう人もいると思うんですけど、それは諦めたという事じゃないと思うのですよね。その人にとっての幸せの形、人生で求めるものを陶芸以外で見つけただけで、それがその人にとっては結果的に幸せだったのだと思います。

私は今まで挑戦をし続けてきたので、“挑戦をし続ける”っていう挑戦をしていきたいですね。

■今回、富田先生との2人展ですがどのようなお気持ちですか？

今まではグループ展では落ち着いた色を使う作家さんと組むことが多かったので、今回富田さんと自分の作品がどう並ぶのか楽しみです。系統は違いますが生命力というテーマ性では富田さんとは大きく共通する部分があると思うのでその点にも注目していただけなら嬉しいですね。

富田美樹子・村田彩展は2022年11月4日(金)から11月26日(土)まで開催予定です。

皆様のご来廊お待ちしております。